東京都公園協会

緑でつながる"まちなか緑化"の成果

プロ用資格「まちなか緑化士」養成も

公益財団法人「東京都公園協会」（東京都新宿区、www.tokyo-park.or.jp）は、公園の魅力アップ、また、市街地の過半を占める民有地の緑化を推進するために昭和60年に基金を設立。現在は27億円（東京都10億円、民間17億円）の基金の利子約4000万円で運用されている。

「まちなか緑化」はその支援事業の一つとして推進されてきた。これは緑を媒介にした独自の「つながり」理論を実践する㈱チームネットの甲斐徹郎氏をプロデューサーにしたプロジェクトで、5年ほど前から5つのモデル地区で展開されてきた。まず'08～'10年、商店街モデルとして「浅草」「久我山」。住宅地モデルとして「中野」（'09～'11）、「池袋」（'10～'12）。集合住宅モデルとして「木場」（'11～'13）である。同協会ではいずれも3年間で1地域800万円の助成金をつけ、ワークショップ、植栽、緑化後のイメージデザイン、専門家の派遣、人材育成等を行ってきた。

このプロジェクトの特徴は、きっかけは公的補助で立ち上がるものの、緑化することで住民自身が利益を受けることの自覚を促し、最終的に地域コミュニティの活性化、快適な環境づくり、自立的運営まで持っていく。甲斐氏は住民とのワークショップのなかで、ガーデンデザイナー正木覚氏と連動し、狭小地の緑化の工夫、緑化された街のイメージの共有化に取り組み、成果を挙げてきた。

同協会は、今後、このモデルケースを参考に各区レベルの「かいわい緑化事業」として東京都全体に普及させていく予定だ。そして最初に手を挙げたのが豊島区（清掃環境部環境政策課事業推進係）で「界わい緑化プログラム」を始動している。

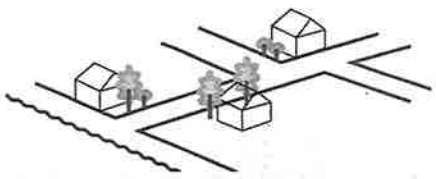
同協会では「フィールドリーダー」「上級フィールドリーダー」「まちなか緑化インストラクター」「まちちなか緑化士」等の講座を開設し人材育成に努めている。

緑を媒介にしたコミュニティの活性化

甲斐徹郎氏（右）と正木覚氏

東京都公園協会 荒井亜紀課長

豊島区「かいわい緑化」プログラムのながれ


向う三軒両隣方式：つながる3軒以上の合意で緑化助成金の申請が可能

緑化後の街のイメージの共有が重要（画：正木覚氏）

まちなか緑化地区に見る緑化の手法

「まちなか緑化」の5つのモデル地区の中で、集合住宅モデル「木場・木場5丁目町会」と住宅地区モデル「中野・桃園町会」をまわり、実際の緑化を見学した。

都市部の場合、最大のネックは狭小地ということだ。それも、出来上がった街に後から緑化スペースを見つける。この難問の様々な解決策が披露された。

ポイントは狭くても草花だけでなくできるだけ中・高木を入れ、緑をつなげるということ。特に角地には高木をいれると緑の風景がつながりやすい。また、管理しやすい常緑樹や同一植物のみでなく、樹木に低、中、高と種類のバリエーションをつける。実のなる木を入れておくとマンションで収穫祭や食事会にもつながる。中野丸井では屋上で養蜂を実践、生物多様性の教育にも展開。

角地に高木を植える

株立ちの高木を1本

角地に高木を入れることで緑がつながる

狭小地緑化

敷地形状に合わせたメッシュプランター

Befor ↓

究極の狭小地をツル性植物で

After：株立ちの地植えでミニ林に

緑がつながる

1軒の点だった緑がつながると線に

プランターの工夫

コストと敷地への対応力を考えられたメッシュフプランター

木調パネルの中を通したワイヤーで締めている。パネルの数でサイズを調整できる。

バリエーションをつける

管理しやすい一般的な集合住宅緑化

土部分は10～15cm幅

感性を刺激するバリエーション緑化

門扉をR形状に、植栽場所確保

プランターから地植えへ

幅をとらないパネル緑化

集合住宅の緑は街路樹、公園とつながり面に

商業施設

少しの緑化によって「入りたくなる店」に